様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０１５２

研究課題名（和文）中世書論に基づく日本書道史の再構築

研究課題名（英文）Reconstructing a View of the History of Calligraphy by Examining Japanese Treatises

研究代表者
永由　徳夫（NAGAYOSHI, Norio）

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：３０５５７４３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本の草創期の書論を精査することで、従来通説となっている日本書道史を再構築することにある。そこで、古書論の一つ、世尊寺家六代目・藤原伊行著『夜鶴庭訓抄』（1165年頃成立）を根幹に据え、伝存する写本を比較・検討し、定本を立てた。これにより、中古・中世の書藝術観が、近世・近代の文人や能書、さらに現代に生きる私たちに与えた影響を明らかにすることができた。本研究を遂行することで、「日本人の美意識とは如何なるものであるか」という観点により、一つの新たな日本書道史観を樹立する契機となった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to reconstruct a view of the history of calligraphy by examining Japanese treatise on calligraphy during its early beginnings. I focused on the Yakaku teikin sho (around 1165), one of the first Japanese treatises on calligraphy, by Fujiwara no Koreyuki, and comparatively examined manuscripts from the medieval to early modern period. It revealed that the artistic view of calligraphy in medieval days had influence not only on the writers and calligraphy itself in the early modern period, but also on people in present days. This research also shows us what the Japanese sense of beauty is, and gives us an opportunity to construct a new view of the history of calligraphy.

研究分野：書論、書道史

キーワード：日本書論　日本書道史　芸術学　美術史　国文学　漢文学

１．研究開始当初の背景

（１）日本書道史研究における書論の位置

これまでの日本書道史研究では、日本書論の一つの特性として、〈秘伝〉であることがしばしば指摘されてきた。とりわけ中古・中世の古書論は、秘事口伝の要素の濃い、書式故実を主として述べるに止まるもの、という固着化した概念で捉えられ、書論として扱うこと自体に対して疑義を呈する風潮もあった。ここ二十年来の書論研究の進捗により、ようやく日本書道史研究の屋台骨として認知されつつあるが、いまだ〈秘伝〉であることが唯一無二の特性として挙げられる傾向があるのも実情である。

（２）『夜鶴庭訓抄』研究における課題

世尊寺家六代目・藤原伊行の著した『夜鶴庭訓抄』（1165 年頃成立）は、日本書論の嚆矢として位置付けられる。ただし、従前の『夜鶴庭訓抄』研究は、専ら『群書類従』（巻 494）所収本を基に行われてきた。善本叢書とはいえ、近世の流布本である『群書類従』に依拠して、中古・中世の書藝術観を論ずるならば、必ずや時代的齟齬を生ずるに相違ないが、これまでこの点について指摘した研究は行われていない。

２．研究の目的

（１）『夜鶴庭訓抄』の定本設定

この研究は、日本の草創期の書論について考察することを通じ、従来の日本書道史を再構築することを意図したものである。

まずは、世尊寺家六代目・藤原伊行著『夜鶴庭訓抄』を根幹に据え、伝存する写本を比較・検討し、定本を立てることを第一義とする。中古・中世の書道に対する考え方を探求することにより、当時の日本人の美意識が、近世・近代の文人や能書、さらに現代に生きる我々に、どのように受け継がれているかを探究する。

（２）書論研究に基づく日本書道史研究

１．で述べたように、日本書論研究はこれまでほとんど顧みられなかった領域である。日本の特殊事情でもあるが、どうしても伝存する肉筆遺品に目が奪われがちとなり、筆跡考証を主眼とする古筆学が日本書道史研究の中心を担ってきた。それ自体は意義深いことであるが、往々にして印象批評の謗りを免れない状況もまま起こり得る。

かくて日本書論研究を深めることで、従来通説となっている日本書道史を多角的に検証する必要が生ずる。「日本人の美意識とは如何なるものであるか」という観点により、書論の精緻なる考証を踏まえて、新たな日本書道史観を構築することが、本研究の最大の目的である。

３．研究の方法

（１）基本的資料の収集・整理

研究に臨むにあたり、『夜鶴庭訓抄』の各種写本を収集し、整理する。その際に、世尊寺家七代目・藤原伊経系統および八代目・藤原行能系統とされる中世の初期写本と、『群書類従』所収本系統の近世の流布本とに大別し、両者の相違点を明らかにする。その上で、研究初年度に当たる平成 23 年度においては、『夜鶴庭訓抄』における中世の初期写本と近世の流布本との隔たりを埋めていく作業に着手する。

研究期間を通じて、大学図書館・博物館・美術館等で調査・研究を行う。また、学会・研究会に参加して知見を広め、大学・大学院での講義によって考察を深めながら、書論研究を通じ、当時の日本人の美意識を探ることとする。

（２）『夜鶴庭訓抄』各種写本の翻刻と校訂作業

平成 23 年度・24 年度においては、『夜鶴庭訓抄』各種写本の翻刻を行う。まずは、中世最古の写本と考えられる藤原伊経系統の京都・青蓮院蔵本を底本として、翻刻作業を進める。

次いで、藤原行能系統の宮内庁書陵部蔵本、東北大学附属図書館狩野文庫蔵本、天理大学附属天理図書館蔵本、神奈川県立金沢文庫保管・称名寺蔵本等を翻刻する。さらに、近世の写本の一つであるが、中世から近世にかけての過渡期の様子が窺える東京大学史料編纂所蔵本の翻刻を行う。

これら中世の初期写本の翻刻作業と併せ、近世の流布本の先駆けとなった京都大学附属図書館蔵本や『群書類従』所収本と突き合わせながら、校訂作業を完遂する。

（３）『夜鶴庭訓抄』の定本設定と新たな解釈の提示

平成 25 年度・26 年度は、これまでの校訂作業に基づき、『夜鶴庭訓抄』の定本を設定する。従前には見られぬ新しい角度から、本来あったであろうはずの『夜鶴庭訓抄』の姿を明らかにする。その上で、定本に基づき、新たな解釈を提示する。

また、中古・中世の書藝術観を踏まえながら、日本書道史における時代区分について検討する。日本書道史における時代区分は、単に日本史における区分をそのまま書に当てはめただけではないのか、という疑義に対して、『夜鶴庭訓抄』研究に基づき、往時の書道史観を示すこととする。

本研究の成果は、学会・研究会での研究発表、また、研究誌・紀要等において論文を発表する。これら公表の機会を通じて、日本書論研究に基づく新たな日本書道史観を構築する。

４．研究成果

（１）『夜鶴庭訓抄』校訂の結果

中世最古の写本と考えられる世尊寺家七代目・藤原伊経系統本である京都・青蓮院蔵本を底本とし、八代目・藤原行能系統本である宮内庁書陵部蔵本、東北大学附属図書館狩野文庫蔵本、天理大学附属天理図書館蔵本、神奈川県立金沢文庫保管・称名寺蔵本等によって校訂作業を行った。

これら中世の初期写本と『群書類従』所収本を中心とする近世の流布本とを比較し、検証した。加えて、近世の写本の一つであるが、中世から近世にかけての過渡期の様子が窺える東京大学史料編纂所蔵本の翻刻を行い、校訂作業を完遂した。この作業を通じて、中世の初期写本と近世の流布本とでは、以下の2点の相違が明らかとなった。

・中世の初期写本は、漢字片仮名交じり文で書かれ、敬体で述べられる。一方、近世の流布本は、漢字平仮名交じり文で書かれ、常体で記される。
・中世の初期写本においては「カクスコト」（第5条）、「秘説」（第16条）、「秘蔵」（第19条）のように表記される所、近世の流布本では、都合三箇所とも「秘説」の一語に統一される。

敬体が常体になったこと、漢字片仮名交じり文が漢字平仮名交じり文になったこと、という表記の変化については、『夜鶴庭訓抄』というテキストが、「私の家の書」から離れ、「書論」として一般化したからであると結論付けた。

中世の初期写本では「カクスコト」、「秘説」、「秘蔵」とさまざまに表記される所、近世の流布本では、「秘説」の語に統一される点については、以下のように考察した。中世の初期写本における「カクスコト」（第5条）は「大嘗会屏風」について、「秘蔵」（第19条）は「年中行事障子」について記述した項である。「大嘗会屏風」「年中行事障子」の揮毫は、いずれも人目に触れる、寧ろ書の家としての面目躍如たる華やかな場である。その家の奥儀としての「秘説」とは意味合いが異なり、「またとない重要事として大切にする」と解するのが妥当である。近世において「秘説」の語に統一されたのは、奥儀秘伝の様相を強めながら「世尊寺家の家の書」を標榜することで、却って普遍化を図ったからである。
（下記5.〔雑誌論文〕⑤，③，①）

（２）〈秘伝〉の視点から俯瞰した日本書論

日本書論は往々にして〈秘伝書〉として捉えられてきたが、中国書論を丹念に検証してみると、そこにも〈秘伝〉という概念を看取することができる。にも拘らず、何故日本書論についてのみ〈秘伝書〉としての性格が付与されるのであろうか。

それは（１）で述べたように、概ね日本書論には、時代が下るにつけて、〈秘説〉としての意識が増していく傾向があるのに対し、中国書論では〈秘訣〉としての意味合いが強調されるからである。文字を刻することで堅牢なる永続性を希求した「石の文化」の中国と、一見脆弱であるものの、一千年の時を超えていともしなやかに伝わる「紙の文化」の日本とでは、自ずと相違は生ずるであろう。

かの中国とは異なり、「紙の文化」である日本には、幸いなことに多くの肉筆遺品が遺されている。だが一方で、このことが日本書道史研究に往々に見られる印象批評の弊を生ぜしむる原因ともなっていることを看過してはならない。その意味でも、「遺品」と「書論」の連関には細心の注意を払うべきであり、この学究態度こそ、日本書道史研究の新たな地平を切り拓くことにつながる。
（下記5.〔雑誌論文〕④　〔学会発表〕②）

（３）「書論」と「遺品」の連関による日本書道史観の樹立

本研究は、中古・中世の書藝術観を明らかとすることを根幹に据えたものであるが、無論その一時代を取り出して論じても十全とは言えず、日本書道史全体の流れから俯瞰する必要がある。

中古・中世の書は、日本書道史の流れの中でも、特に華やかな時期である。そこで、日本書道史における時代区分論を検討すると、大きく二説に分けることができる。

一つは、所謂日本史の時代区分に準拠したものである。この説の根拠は、書が単独で文化を形成するわけではなく、時代の中に書は存在するというところにあり、通史としての日本書道史を強調したものである。今一つは、書風の発達、変遷、盛衰に基づく、書そのものに即応した書道史観である。

たとえば、平安時代の唐風文化から国風文化へという流れの中で「三筆（空海・嵯峨天皇・橘逸勢）」と「三蹟（小野道風・藤原佐理・藤原行成）」を捉えるのが日本史に準拠した通史としての書道史観であり、「三筆」と「三蹟」を書風の変遷によって別の時代区分とするのが書に即応した書道史観である。

両説ともに首肯できる理はあるが、いずれにも課題は残されている。たとえば、日本史の時代区分に準拠した通史としての書道史について言えば、時代区分のはざまにおける諸問題を解決しなければならない。一方、書風の変遷により時代区分を行うという書道史のあり方も、一見本来的ではあるが、個人の技量に過度に追うという点で、危ういところがある。（２）で述べたように、中国とは異なり、日本には多くの肉筆遺品が遺されていることは特筆すべき事象であるが、それが故に、却って一部の能書の技量によって、時代区分まで決してしまって果たして良いのであろうか。実は個々の技量の違いであったものを、現代に生きる我々が、時代としての

書風の変遷として知らず知らずのうちに置換している可能性も無くはない。主観的な見方をできるだけ払底するためにも、書論の検証は不可欠である。

『夜鶴庭訓抄』の中では、既に時代区分の意識が包含されている。たとえば、第 21 条では「内裏額書タル人」として、往時の能書を列挙する。十二門額の揮毫者として、弘法大師（空海）・小野美材・橘逸勢・嵯峨天皇を挙げ、内額の揮毫者として、小野道風・藤原佐理・藤原行成等を列挙する。また、第 24 条では「能書人々」として所謂「三筆」「三蹟」等の名を出自・官職とともに記している。

底本とした青蓮院蔵本では、この「能書人々」の条は、伊行の祖父である世尊寺家四代目・藤原定実をもって終わるが、少しく遅れるところの宮内庁書陵部蔵本には、定実の後、「三生（聖）」として「弘法大師　北野天神（菅原道真）　小野道風」を挙げる。『夜鶴庭訓抄』の残した足跡が、今日の書道史観に影響を与えていることが窺え、大変興味深い。（下記 5.〔雑誌論文〕②）

（４）総括ならびに今後の展望

これまでの日本書道史研究では、日本書論の一つの特性として、〈秘伝〉であることが指摘されてきた。とりわけ中古・中世の古書論は、秘事口伝の要素の濃い、書式故実を主として述べるに止まるもの、という固着化した概念で捉えられ、書論として扱うこと自体に対して疑義を呈する傾向があった。確かに辞典類を繙くと、日本古書論に対しては、概ね「書式故実を述べ、家の書を論ずるに止まる秘事相伝の書」といった捉え方が通行している。

だが、中古・中世の日本人が説くところの「カクスコト」「秘蔵」「秘説」といった謂いと、近世の日本人が捉える「秘説」、さらには現代に生きる我々が「秘伝」の語に懐く漠としたイメージとには、少しく差異があるのではなかろうか。

たとえば、『風姿花伝』をはじめ、〈秘伝書〉の多くは、何故今日に至るまで伝存しているのか。それは、「秘すること（秘する形を取ること）」が、実は結果として後世に伝え遺す最大最良の方法であったからである。「秘するところの美」は、日本古来の特性として、脈々と受け継がれてきた美意識である。かかる日本人の思想性・精神性は、その時代時代の要請の中で誕生し、より深く醸成されていったのであろう。伝え遺すということに関しては、保存のための機器に恵まれている現代の我々よりも、往時の日本人の方が、より強い飢餓感を持っていたことは明らかである。

中古・中世の書論は、当時の社会と文化の大きなうねりの中で成立した、謂わば「書の古典籍」である。この延長上に近世書論は存在するが、ここでキーワードとなるのが「入木道」である。この語は、中古・中世においては、概ね「書道」の異称として用いられた。だが、近世になり、たとえば持明院流当主が自流関連の書論名に、『入木道秘伝』『入木道相伝事』のように「入木道」の語を冠するようになると、「書道」の単なる異称ではなく、「秘伝としての書式故実を重んじる流儀書道」という限定した意味合いに変容していく。

では何故、日本書論全般が〈秘伝書〉として捉えられるようになったのか。その大きな要因の一つとして、江戸時代の唐様の隆盛ならびに中国書論の受容が挙げられる。近世書論は、流儀書道を標榜した和様書論と中国書論の摂取に努めた唐様書論とに大別されるが、唐様書論が『説文解字』を筆頭に、『書譜』『書断』『東坡題跋』『山谷題跋』等を頻繁に引用して談論風発の様を呈したことは、縷々継承されてきた「書流」の存続に危機感をもたらしたと推測される。時にいっそう「流儀書道」を標榜することとなり、和様書論の硬直化・形式化を招いたのである。そのことが、我々の「日本書論観」に実際以上に大きな影を落としたのではあるまいか。今後、周辺の学問領域も含めて精査することで、「日本書論は〈秘伝書〉である」という固着化した捉え方は修正され、新たな日本書道史観が樹立されてゆくであろう。

（下記 5.〔雑誌論文〕①　〔学会発表〕①）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①<u>永由徳夫</u>、新釈『夜鶴庭訓抄』（二）、群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編、査読無、64 巻、2015、23－31

②永由徳夫、日本書道史における時代区分考、書論、査読有、40 号、2014、145－160

③<u>永由徳夫</u>、新釈『夜鶴庭訓抄』（一）、群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編、査読無、63 巻、2014、29－41

④<u>永由徳夫</u>、〈秘伝〉の視点から俯瞰した日中書論、査読有、書学書道史研究、22 号、2012、1－12

⑤<u>永由徳夫</u>、校本『夜鶴庭訓抄』（二）、群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編、査読無、61 巻、2012、31－39

〔学会発表〕（計 2 件）

①<u>永由徳夫</u>、中世書論の意義と展開、第 58 回 東洋文化談話会発表大会、2012.11.11、公益財団法人 無窮会

②<u>永由徳夫</u>、秘伝としての書論、第 22 回 書学書道史学会大会、2011.11.12、大東文化大学

６．研究組織

(1)研究代表者

永由　徳夫（NAGAYOSHI, Norio）
群馬大学・教育学部・教授
研究者番号：３０５５７４３４